

## 【特集】

〈第33回大会シンポジウム「高校の新学習指導要領をどのように考えるのか」〉

# シンポジウムの趣旨とまとめ

國分麻里\*

## 1. シンポジウムの趣旨

2014（平成26）年12月6日、筑波大学文系修士棟において第33回中等社会科教育学会のシンポジウムが開催された。テーマを「高校の新学習指導要領をどのように考えるのか」とし、趣旨を以下のように設定した。

今回の学習指導要領改訂に向けての動きが活発になっている。大学入試改革が進行する中で、社会科関連では日本学術会議による地理基礎・歴史基礎の提案、文科省による日本史必修化の動き、道徳の教科化から派生した高校「公共」の行方などがその代表的なものである。本シンポジウムでは、こうした高校新学習指導要領の動きに対して、どのように高校の地理歴史科・公民科を考えていくべきなのかをそれぞれの立場から議論する。

コーディネーターとして、本シンポジウムで重視したのは以下の2点である。

1点目は、文科省を中心とした学習指導要領改訂や大学入試改革の動きとは別に、実際のところ現場の状況はどのようなものであるのか、また、そのような現状を踏まえて何が社会科、地歴科・公民科に望まれているのかということを探ることであった。

2点目は、上記のシンポジウムの趣旨を踏まえて、社会科と道徳教育の関係をさぐることであった。ここでの焦点は価値をどのように考えるのかという問題である。

シンポジストは中野理恵氏（新潟県立国際情報高校）、藤野敦氏（東京学芸大学附属高校）、細戸一佳

氏（帝京大学教職大学院）をお願いした。中野氏と藤野氏には、現職教員としてそれぞれ地理・歴史教育の立場からの状況および実践の紹介をお願いした。細戸氏には大学院時代は社会科教育を専門にしながらその後は道徳教育で活躍されていることを踏まえて、社会科と道徳との関係を中心にお話しいただくことにした。

## 2. シンポジウムのまとめ

シンポジウムの具体的な内容については、本学会誌33号と次頁以降のシンポジストの論考を見ていただきたい。まとめとして以下の3点を指摘したい。

1点目。現在の授業で必要なものとして思考力の育成が挙げられた。これは中野氏や藤野氏からの指摘であったが、これに加えて、教師の心構えや目標も大切であるという発言があった。

2点目。新しく変えていくだけでなく、今あるものを大切にするという指摘がなされた。藤野氏からはまだまだ今の学習指導要領や授業実践を深めて進化する余地があるという話があり、その事例として日本史と技術科などとの連携をした授業実践を報告された。

3点目。道徳と社会科の関係については、価値の問題に関して細戸氏からは社会科でも道徳の対置ができるということ、生活に密着した「初期社会科」が現在も必要な視点であり内容であることが指摘された。

以上のように、3時間ほどの短時間であったが、現在の学校現場の状況、そこで望まれる資質とその育成方法、価値をめぐる社会科と道徳の関係など、今後につながる議論ができたと思う。

\*筑波大学